

中間発表：重み付きモードマッチング法による音場 再現

Ryosuke Horiuchi

Tokyo, Japan

June 21, 2019

- ① 問題設定
- ② 球面調和関数を基底に用いる手法
- ③ シミュレーション結果
- ④ 今後の方針
- ⑤ 参考文献

問題設定

以下の図のようにある音場を、 $r_l (l \in \{1, \dots, L\})$ に置かれた L 個の音源を用いて再現する.

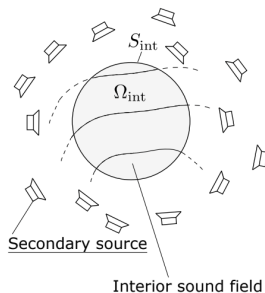


Figure: 想定する状況

問題設定

l 個目の音源の駆動信号を $d_l(\omega)$ とし、ある場所 \mathbf{r} への周波数 ω の伝達関数を $G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_l, \omega)$ とすると、 \mathbf{r} における音圧は、

$$p_{\text{syn}}(\mathbf{r}, \omega) = \sum_{l=1}^L G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_l, \omega) d_l(\omega) = \mathbf{g}(\mathbf{r}, \omega)^\top \mathbf{d}(\omega)$$

とかける。ただし、

$$\mathbf{d}(\omega) = [d_1(\omega), \dots, d_L(\omega)]^\top$$

$$\mathbf{g}(\mathbf{r}, \omega) = [G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_1, \omega), \dots, G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_L, \omega)]^\top$$

とした。

注) 以下は周波数を固定した議論であるので、 ω は省略する。

問題設定

再現したい領域を $V_q (q \in \{1, \dots, Q\})$ とすると、その領域での二乗誤差の和は、

$$\mathcal{J} = \sum_{q=1}^Q \int_{\mathbf{r} \in V_q} |p_{\text{syn}}(\mathbf{r}) - p_{\text{des}}(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} = \sum_{q=1}^Q \int_{\mathbf{r} \in V_q} \left| \mathbf{g}(\mathbf{r})^\top \mathbf{d} - p_{\text{des}}(\mathbf{r}) \right|^2 d\mathbf{r}$$

と表され、この最小に基づき駆動信号 \mathbf{d} を求める。

しかし、積分を解析的に解くことができない。

注) 簡単のため、以下では、 $V_q (q \in \{1, \dots, Q\})$ は球であるとする。

球面調和関数を基底に用いる手法

球面の内部で定義される任意の入射音場 $p(\mathbf{r})$ は、基底

$\varphi_{\nu,\mu}(\mathbf{r}) = j_{\nu}(kr)Y_{\nu,\mu}(\hat{\mathbf{r}})$ を用いて、

$$p(\mathbf{r}) = \sum_{\nu,\mu} \alpha_{\nu,\mu} \varphi_{\nu,\mu}(\mathbf{r})$$

と展開できる。ただし、

- $k(= \omega/c)$: 波数
- $j_{\nu}(\cdot)$: ν 次の第一種球面ベッセル関数
- $Y_{\nu,\mu}(\cdot)$: 球面調和関数

例えば、点音源からの伝達関数は、以下のように球面調和関数展開できる。

$$\begin{aligned} G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_s) &= \frac{e^{ik|\mathbf{r}-\mathbf{r}_s|}}{4\pi |\mathbf{r} - \mathbf{r}_s|} \\ &= ik \sum_{\nu=0}^{\infty} j_{\nu}(kr) h_{\nu}(kr_s) \sum_{\mu=-\nu}^{\nu} Y_{\nu,\mu}(\theta, \phi) Y_{\nu,\mu}(\theta_s, \phi_s)^* \end{aligned}$$

球面調和関数を基底に用いる手法

これを用いると、球面領域 V_q の中心を、展開の中心として、

$$G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_l) = \sum_{\mu,\nu} c_{\mu,\nu,l}^{(q)} \varphi_{\mu,\nu}^{(q)}(\mathbf{r})$$
$$p_{\text{des}}(\mathbf{r}) = \sum_{\mu,\nu} b_{\mu,\nu}^{(q)} \varphi_{\mu,\nu}^{(q)}(\mathbf{r})$$

と基底変換をすることができる.

球面調和関数を基底に用いる手法

ここで無限和を有限和で近似するために、 $0 \leq \nu \leq M_\nu$ で打ち切ると、 $|\mu| \leq \nu$ なので、全体は有限和となって、

$$\begin{aligned} G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_l) &= \sum_{\mu,\nu} c_{\mu,\nu,l}^{(q)} \varphi_{\mu,\nu}^{(q)}(\mathbf{r}) \approx \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^\top \mathbf{C}_l^{(q)} \\ p_{\text{des}}(\mathbf{r}) &= \sum_{\mu,\nu} b_{\mu,\nu}^{(q)} \varphi_{\mu,\nu}^{(q)}(\mathbf{r}) \approx \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^\top \mathbf{b}^{(q)} \end{aligned}$$

さらに、

$$\mathbf{g}(\mathbf{r}, \omega)^\top = [G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_1, \omega), \dots, G(\mathbf{r}|\mathbf{r}_L, \omega)] \approx \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^\top \mathbf{C}^{(q)}$$

とかける。ただし、

$$\varphi^{(q)}(\mathbf{r}) \in \mathbb{C}^{(M_\nu+1)^2}, \mathbf{C}^{(q)} \in \mathbb{C}^{(M_\nu+1)^2 \times L}, \mathbf{b}^{(q)}(\mathbf{r}) \in \mathbb{C}^{(M_\nu+1)^2}$$

$$\mathbf{C}^{(q)} = [\mathbf{C}_1^{(q)}, \dots, \mathbf{C}_L^{(q)}]$$

球面調和関数を基底に用いる手法

これより、

$$\mathcal{J} \approx \sum_{q=1}^Q \int_{\mathbf{r} \in V_q} \left| \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^\top \left(\mathbf{C}^{(q)} \mathbf{d} - \mathbf{b}^{(q)} \right) \right|^2 d\mathbf{r} \quad (1)$$

$$= \sum_{q=1}^Q \left\{ \left(\mathbf{C}^{(q)} \mathbf{d} - \mathbf{b}^{(q)} \right)^\mathrm{H} \int_{\mathbf{r} \in V_q} \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^* \varphi^{(q)}(\mathbf{r})^\top d\mathbf{r} \left(\mathbf{C}^{(q)} \mathbf{d} - \mathbf{b}^{(q)} \right) \right\} \quad (2)$$

$$= \sum_{q=1}^Q \left(\mathbf{C}^{(q)} \mathbf{d} - \mathbf{b}^{(q)} \right)^\mathrm{H} \mathbf{W}^{(q)} \left(\mathbf{C}^{(q)} \mathbf{d} - \mathbf{b}^{(q)} \right) \quad (3)$$

ただし、 $\mathbf{W}^{(q)} \in \mathbb{C}^{(2M_\nu+1)^2 \times (2M_\nu+1)^2}$ であり、 V_q の半径を R_{int} として、

$$w_{\nu_1, \mu_1}^{\nu_2, \mu_2} = \delta_{\nu_1, \nu_2} \delta_{\mu_1, \mu_2} w_{\text{uni}, \nu_1}$$

$$w_{\text{uni}, \nu} = 2\pi R_{\text{int}}^3 \left(j_\nu(kR_{\text{int}})^2 - j_{\nu-1}(kR_{\text{int}}) j_{\nu+1}(kR_{\text{int}}) \right)$$

つまり、 $\mathbf{W}^{(q)}$ は対角行列となる。

球面調和関数を基底に用いる手法

これより、よって、 \mathcal{J} を d で偏微分することで、

$$\hat{d} = \left(\sum_{q=1}^Q C^{(q)H} W^{(q)} C^{(q)} + \lambda I \right)^{-1} \sum_{q=1}^Q C^{(q)H} W^{(q)} b^{(q)}$$

が得られる。
ただし、

$$\mathcal{J} = \sum_{q=1}^Q \int_{\mathbf{r} \in V_q} |p_{\text{syn}}(\mathbf{r}) - p_{\text{des}}(\mathbf{r})|^2 d\mathbf{r} + \lambda d^H d$$

と、ランク落ちを防ぐために $\lambda d^H d$ を付け加えた。

シミュレーション結果

スピーカを 12 個配置したと想定上で、周波数が 150Hz の時.
再現領域：青い球内 ($Q = 1$), 仮想点音源：青点

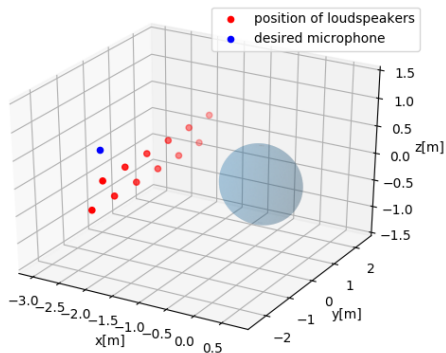


Figure: シミュレーションの条件

シミュレーション結果

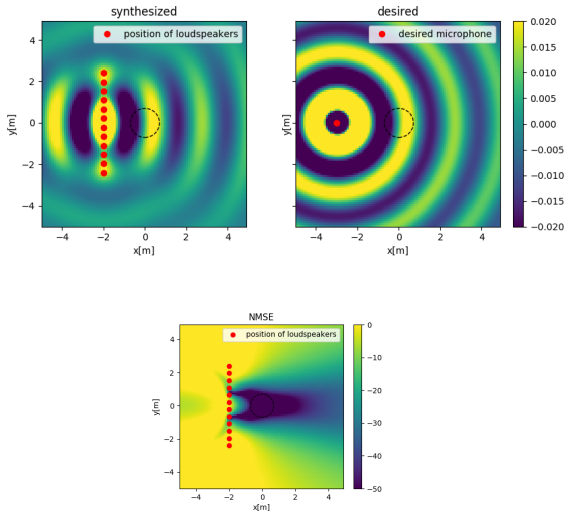
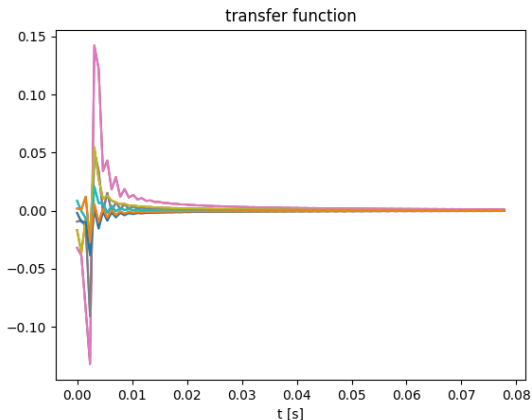


Figure: 左上：合成波、右上：目標波、下： $z = 0$ での正規化二乗誤差 (単位: dB)

シミュレーション結果

最大周波数を 4000 とし、幅 7.81(つまり、512 分割)の周波数でそれぞれ伝達関数を求め、逆フーリエ変換によって、時間領域でのフィルターを求めた。



今後の方針

- マルチゾーンの実装.
- 実環境で主観評価を行う.
(時間的な制約があるので、被験者を集めるのは難しそう.)
- コードのリファクタリング.

- N. Ueno, S. Koyama, and H. Saruwatari, "Listening-area-informed sound field reproduction based on circular harmonic expansion"
- N. Ueno, S. Koyama, and H. Saruwatari, "Three-Dimensional Sound Field Reproduction Based on Weighted Mode-Matching Method"
- M. A. Poletti, "Three-Dimensional Surround Sound Systems Based on Spherical Harmonics"

- ① 問題設定
- ② 球面調和関数を基底に用いる手法
- ③ シミュレーション結果
- ④ 今後の方針
- ⑤ 参考文献